

# 高度経済成長が川上と川下の 住民にもたらした影響

太田川を例として

Effects of High Economic Growth on Upriver and Downriver Residents :  
An Example of the Ohta River

千田武志

CHIDA Takeshi

はじめに

①高度経済成長と広島県

②高度経済成長期における川上の山村と川下の都市の変容

③広島県の高度経済成長に影響を与えた二つの政策

④高度経済成長期の川上と川下の変貌とそれをもたらした要因

おわりに

【論文要旨】

本稿は広島県に例をとり、太田川の川上と川下とを関連づけながら両者を比較し、高度経済成長の影響を検証することを目的としている。水を媒体にして深く結びついていた川上と川下に視点を置くことによって、これまで経験したことのない激変をもたらした高度経済成長の実態に接近できるのではないかと考えてのことである。

太田川が流れる広島県は、戦後、軍需産業の解体や戦災の影響もあって、経済後進県として出発したが、高度経済成長期に全国平均を上回る発展を達成し、経済先進県の仲間入りを果たした。こうしたなかで第2次、第3次産業は急成長し、川下の都市の生産額、所得、人口はおおむね増加したが、第1次産業は停滞し、川上の山村の生産額、所得は伸び悩み、人口は急激に減少した。こうした状況は経済的要因に加え、当時の国や県の施策によって助長された面もあり、また両者には少なからぬ関連性が存在していた。

川上に位置する戸河内、筒賀などの町村の営みは、かつては農業と林業を主要産業とし、自給自足に近い生活をしながら、木材と余剰農産物を太田川の水運によって川下に運び販売し、その資金で日用品を購入することで成り立っていた。こうした継続性のある再生産の可能な関係は、高度経済成長期に太田川において電力の一貫完全開発が完成し、国の指導により経済林を目指した山林経営が強力に推進されて以降、一変した。自然が経済に従属させられ、皮肉にも経済的に価値のある生産物を失った川上の山村の住民は、川下の都市に出て労働力を販売することによって生活を維持しなければならなくなり、深刻な過疎状況が現出したのであった。

川上と川下は単に地理的だけではなく、高度経済成長においてどのように位置づけられたかという社会的要因を加味した概念と考えられる。そして川上のなものの喪失は日本人、ひいては人類の多様性、共同性が失われることを意味し、その回復が共通の課題として提起されている。

【キーワード】 高度経済成長、川上と川下、都市の成長、山村の衰退、電源開発